



2023年

5月第3・4週の主日礼拝説教要約

・ 5月21日：使徒言行録 1：3 - 11 .

『 神の子の帰郷 』

・ 5月28日：使徒言行録 2：1 - 8 . ( 9 - 42 )

『 ペンテコステ 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

## 《 神の子の帰郷 》

天地の造り主であり全能の父である神を信じることから始まるのが、キリスト教の信仰です。興味深いのは、神は「地」ばかりか「天」をもお造りになりました（創世記1：1）。つまり天も神の“被造物”であるという点では人間や石ころと同じです。さらに、天から降って来たキリストが“帰郷”する場所もまたそこです（ヨハネ福音書3：13）。キリストが最後に弟子たちのために、「居場所を用意する天の父の家（ヨハネ福音書14：2-3a）」があるのもやはりそこです。さらに、イエスが最後に弟子を迎えるための、「私のいる所（同14：3b）」と言及しているのもそこです。何か仏教の“彼岸”ともよく似ています。

さて、元々預言者以上の存在であるイエスが、“地上”で一人の預言者という扱いを受ける時には、「故郷（ナザレ）に容れられない」存在と化します。だからと言って、ベツレヘムやカファルナウムが、これ（故郷）に取って代わることはありません。

死から甦ったイエスが地上で最後に弟子たちに命じたのは、「エルサレムから離れずに、父なる神の約束（聖霊降臨）を待つ」ことでした。

ただ、この数か月前にイエスはエルサレムに向かって、以下のように嘆いたことがありました。

エルサレム、エルサレム、預言者達を殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、雌鶏が雛を羽の下に集めるように、私はお前の子らを何度、集めようとしたことか。だが、お前達は応じようとしなかった。見よ、お前達の家は見捨てられる。

（ルカ福音書13：34-35a,他）

紀元70年にローマ軍の手によってエルサレムは陥落し神殿は崩壊します。イエスはそのことを何度も予言（警告？）しました。それでもイエスのご自身の天への“帰郷（=昇天）”の直前に、弟子たちにはエルサレムに留まることを命じているのです。神殿崩壊までに、あと40年です。

出エジプトの荒れ野の40年、バビロニアでの捕囚が半世紀余りでした。さらに、イエスの昇天から、ローマ軍によるエルサレムの陥落、崩壊まで

あと40年に迫っています。イスラエルの歴史の中に、神が設けた幾つかの時限措置が見て取れます。神殿崩壊までの最後の40年間でユダヤ教徒と、キリスト教徒との分離が成立していくのかもしれませんが。同時に両者の神殿を中心とした信仰形態は、その崩壊をもって終焉を迎えることになるでしょう。教会はキリスト教徒のために神殿の役目を引き継ぐことになります。神を信じる信仰に、もはや巨大な建造物は不要です。

さて、イエスが地上から天へと旅立ったのは、「オリーブ畑と呼ばれる山」、すなわちオリーブ山からでした。そこはエルサレム近郊にある山です。また、そこは紀元70年のローマ軍の攻撃からは免れる場所でもありました。

オリーブ山から旅立つイエスの姿を弟子たちが目で追って中空を見上げています。すると、今度は山上の彼らの横に正体不明の白い衣を着た二人の人物（天使？）が出現して、「あなた方を離れて天へと昇ったイエスは、見た通りの如くに、再び（天から戻って）来られる」ことを通知します。

キリスト教徒とは、「その日を待ちつつ」生きる人生が与えられた存在なのです。

「イスラエルの家はみな、はっきりと知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです」（使徒言行録2：36）

これはペトロの言葉です。そこにいた聴衆とは、五旬祭の日に、エルサレムに居合わせて、天からの大きな物音を聞いて集まって来ていた人たちでした。彼らはペトロの言葉を聞いて「大いに心を打たれ」たことが直後に記されています。さて、ここで語られている「イスラエルの家」の意味する内容が、不明です。というのも、物音を聞いて集まった人々とは必ずしもユダヤ人だけではなかったことが、2章の5節以下にはっきりと記されているからです。この時ユダヤ人以外に、帰宅命令が出されたわけでもありません。

ペトロが「あなたがたが十字架につけたイエス」というのであれば、相手はユダヤ人、乃至はローマ人にほぼ限定することは可能です。今度はそれらの人々がペトロに質問をする番です、「私たちは何をなすべきでしょうか？」と。

すると、ペトロはこう答えました、「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、聖霊の賜物を受けるでしょう。この約束は…私たちの神である主が招いてくださる者なら誰にでも、与えられているものなのです」。

その日に、そのとおりにした人々は3千人ほどであったと。もちろんイエスの処刑を支持していた者らも含めて。

これは驚くべきことであり、また決定的なことでした。神の赦しが、イエスの復活後50日を経た聖霊降臨の日に、こうしていとも簡単に成立していたのです。すでに天に帰られたイエスはその日、新たに「彼ら（3千人）の主でもあるキリスト」になられたのでした。

その後、100年ほど続く、いわゆる原始キリスト教会の宣教のかたちが、ここに見て取れます。かつて、敵対者らがイエスを歓迎しない、ただそれだけの理由で、「天から火を下し、焼き滅ぼす（ルカ福音書9：54-9）」ことを望んだ弟子たちも、天からの聖霊の大きな力により、すでに心を入れかえていたのです。